

---

# 歪兄妹愛日記

神ノ左翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歪兄妹愛日記

### 【Nコード】

N4637X

### 【作者名】

神ノ左翼

### 【あらすじ】

兄の碧は、妹の美紀に愛されていた。しかし、それは単なる兄妹愛だ、と思っていた。

あの日までは……。

病んでいく妹と、精神不安定な彼女。そして、愛されすぎた兄。とある方からの依頼により、左翼が書く、兄妹ものヤンデレ小説。

## 第一話

「お兄ちゃんっ！おっはよー！！」

「ん。ああ、おはよう」

いつも通りの朝。兄の碧は目<sup>みどり</sup>が覚めた。

「お兄ちゃん、今日は何処行くのっ？」

「学校に決まってるんだろ？」

「だよねっ！美紀<sup>みき</sup>も一緒に行く！！」

妹の美紀。多少ブラコンの気があるが、根は良い子だ。そう思っていた。

あの日までは

---

学校を終え、部活動に所属していない碧は、幼馴染であり恋人の蒼<sup>あ</sup>香<sup>おか</sup>と歩いていた。

ここの二人が付き合っていることを知っている者は少ないだろう。これまでも、「幼馴染だから」と言って誤魔化してきた。

「あの、さ…。碧君…。手、繋がらない？」

「あ、ああ。いいぜ」

平静を装うが、心臓の音は止まない。

「碧君の手、温かいね」

「そ、そうか？」

映画ではよくある台詞だが、実際に言われるとここまで緊張するとは思っていなかった。

そして二人は公園のベンチに座る。

「ねえ」「あのさ」

言葉がかぶる。

「そっちからどうぞっ」「オマエからでいいよっ」

二人とも頬を赤らめ、視線を外す。

「碧君から…」

「んと、さ。俺たち、付き合ってもう結構経つだろ？そろそろ、さ…」

この先がいつも言えなかった。今日こそ言おう、と決心してきたのだ。

「キス…しよ」「キス…しないか？」

蒼香のほうが早くその言葉を言った。

「先に、言われちゃったな…」

二人は、唇を重ね、互いの愛を確かめ合う。

時間にしては数秒程の短いもの。しかし、二人にとっては、それがとても長く感じられた。

もう一度、唇を重ねようと、彼女を抱きしめようとした、しかし、視線を感じ振り向いてみる。

この時間だ。誰がいてもおかしくないか、そう思っていた。しかし――

そこにいたのは、買い物袋を下げた、妹の美紀だった。

――「お兄、ちゃん…？蒼香さんと、何、やってるの……？」

## 第一話（後書き）

あらずじにも書いたとおり、依頼モノです。  
ヤンデレってよくわかんないっ！  
こんな感じでよければ……どうでしょう？

## 第二話（前書き）

PCがとある事情により没収されていたので、予定より遅い更新です。

## 第二話

「な、何って…。幼馴染だからって問題あるかよ…？」

「そんなこと訊いてるんじゃないッ！」

ビクッ！つと碧と蒼香は肩を震わせる。

「なんなんだよ、急に！」碧も叫ぶ。言い合いになる気もしたが、仕方ないだろう。

美紀もそれを予想したのか、ここでの言及は諦めた。

「……もういい。お兄ちゃん、家で話聞くから蒼香さんじゃあね。さ、お兄ちゃん帰ろ」

拒否する間髪さえ空けずに、美紀は碧の手をとり家へ向かう。

「あ…」蒼香は美紀の行動に思わず声を出してしまった。

「何？」年上に対する礼儀さえ失った言葉遣いで美紀は言葉を返す。

「なんでも、ない……」

「おい美——」「家に着くまで喋らないで」

いつもの何十倍も冷たい声で美紀は呟く。

（どうしたんだよ……。何に怒ってるんだ…？）

家に着くまで、兄妹は一言も発さなかった。

家に着き、買ってきた物を一通り片付ける。そして、美紀は後ろ手で玄関の鍵を閉めた。碧は妹が何に怒っているのか、考えていた。沈黙が続く。

「……で。お兄ちゃん」

沈黙を破ったのは美紀のほう。

「さっきの話。詳しく聞かせて」

「ちよつと待てよ。兄妹だからってなんでも話せるわけないだろう？」  
なるべく落ち着いて話を進めようとする碧。

「いいから。話して」

美紀の言葉に碧は、はじめて恐怖を覚え、渋々話し始める。

二人が付き合うきっかけ、付き合い始めて何年経ったか。

しかし美紀は、デートの回数やキスの回数、手を繋いだ回数、行った場所。それら全てを尋ねてくる。

まるで、二人を絡める蜘蛛の巣を張り巡らすかの様に。

——そして突然。落ち着いてい美紀の表情が一変した。

「そんなに蒼香さんとデート行つたの！？手もそんなに繋いだの！？キスだって今日がはじめてじゃないんでしょ！？」

「お、おい美紀！落ち着けて！！」

「私がいるのに！！蒼香さんと何やってるの！私はこんなにもお兄ちゃんが好きなんだよ…っ！？」

途中から涙声になる美紀。しかし碧が引かなかったところはそこではない。

「なんだよ、『好き』って！兄妹だろ！？そんなのあるわけ——

——

碧は思い出す。美紀——妹との過去を。

「美紀、オマエ……。俺のこと……」

「もういいよ、お兄ちゃん……」

「悪かった、兄妹だから、そんな感情は無いと思ってた」

言葉の裏に疑問はたくさんある。しかし、美紀の心を傷つけてしまったのは事実。

「ううん、いいの。お兄ちゃん」

「これから、ずっと私と一緒にだもんね？」

疑問符が碧の頭の中に浮かぶ。会話が噛み合っていない。

「そうだまずはお兄ちゃんに近づく雌共を消さないと家に鍵も付けなきや——」「おい美紀……？なんの話をしてるんだ……？」

しかし美紀は兄の言葉にさえ耳を傾けない。

「ああ、お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん  
兄弟ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんオニチャンオニチ  
ヤンオニイチャンオニイチャンオニイチャンオニイ  
チャン」

碧は素直にこう思う。怖い。

妹は悩むと自分の思考の泥沼にはまってしまふのは知っていたが、まさかここまでとは思わなかった。

「じゃあ、お兄ちゃん。部屋、行こっか」

もの凄い力で手首を引っ張られ、部屋へ連れて行かれる。

「それじゃ、お兄ちゃん。私が、どれだけお兄ちゃんのこと好きか、見せてあげるね…?」

## 第二話（後書き）

いかがでしたか？

終わらせる所で悩みましたが、ここで一区切り、としました。  
それでは。

次の話もなるべく早く書こうと思っているので、よろしくお願いします。

### 第三話（前書き）

部活無かったんで、早めの投稿。

### 第三話

「その前に……」

美紀は呟き、

「ちよつと待っててね……?」

部屋を出て行つた。

今のうちに逃げよう、碧はそう想い、椅子から立ち上がりドアノブに手をかける。そして異変に気づいた。

開かない。

「お、おい……!なんだ……?コレ、いつの間に……」

元々、この部屋に外側からかけられる鍵は付いていなかったはずだ。何度も何度もノブを回すが、開く気配がない。

随分時間が経つて、外側から美紀の声がかけられた。

「うふふ、困ってる?お兄ちゃん。落ち着きなよ」

普段の可愛い微笑とは違う、狂氣的な晒い声。

ガチャリ、と鍵が外から空けられ、食事を持った美紀が入ってくる。

「お兄ちゃん、これ。頑張つて作つたの。全部……食べてね……?」

碧は一瞬躊躇つたが、見た目や匂いからおいしそうな食事。

疲れ果てていた碧にとっては願つても無い、妹の手料理としてその目に映つた。

碧が食事をしている間、美紀はずっと兄のことを愛しそうに眺めていた。

碧がコップを空にする度に、ピッチャーから水を注ぐ。

兄が食べ終えた食器は、すぐにお盆へ片付ける。  
それらの行動は気の利く新妻にも見えた。

「ごちそうさま。美味しかったよ」

「本当？」

「ああ」

それは本音だった。本当に美味しかったし、碧は満足だった。

「ありがとね、お兄ちゃん。……………それでね――

それ以降の言葉を聞く前に、碧の意識は遠のいていく。

美紀が話し終わる前に、碧の意識は無くなった。

――その料理、睡眠薬をいれてみたの。そうでもないと……

……………

――逃げちゃうでしょ…？」

### 第三話（後書き）

この前の話で、誤字というミスをしてしまつて……読者様の指摘により気づきました。

今回はそんなミスが無いよう気をつけたのですが…。

全部で八話くらいになりそうです。

## 第四話

「——ん……」

碧は目が覚めると、いくつかの違和感を感じた。

一つ、手が動かせない。

二つ、足も動かせない。

三つ、口を布のような物で縛られ、まともに話せない。

「あ、お兄ちゃん。起きたんだね？」

「……」

「あ、そうか。喋れなかったんだもんね」

先ほどと違って言葉はいつもの調子に戻ったが、表情は狂氣的で、いつそう恐怖感を抱かせる。

碧は、無理に言葉を発しようとはせず、妹がどんな行動をするのかを見ることにした。

しかし、それが誤答だった。

「ねえ、お兄ちゃん。なんで喋ってくれないの？ねえ何か言ってよ、お兄ちゃんとお話したいんだよねえってば！」

「——っ！」

「そうだ…、何も喋らないなら……私のほうからいくね……？」

そう言うと、美紀は碧の瞳をじっと見つめ、

「蒼香さんとキスした分……私にも、してくれるよね……？」

こう続けた。そして、間も空けず碧の唇を奪う。

「んっ……ちゅ、んっ」

舌を絡め、吐息が激しくなり、淫猥な音が響く。

碧は首を振り抵抗するが、縛られている為に身動きが取れない。

（このままじゃ……やばいだろ……）

兄妹間の恋愛、アニメや漫画、官能小説などではよく聞くが、実際にはどれほど危ないことなのだろう。

何秒、何分経ったか。

美紀は舌を絡めるのをやめ、唇を遠ざけた。

「ねえ……お兄ちゃん、兄妹で恋愛なんて、って思ってるでしょ？」

碧は真剣な眼差しで頷く。

しかし、美紀は火照った顔でこう答える。

「でもね……。私は……お兄ちゃんが好きなんじゃないくて、碧っていう人間、異性が好きなの……」

予想はしていた答え。使い古された恋愛小説の台詞。しかし、この場面ではとても異常な答え。

突然、

「ねえわかってよ！女の子が男の人を好きになっちゃいけないの！？それがお兄ちゃんだったら駄目なの！？教えてよ……。お兄ちゃんが……お兄ちゃんじゃなかったら、よかったの……？……でも、それじゃ私はお兄ちゃんに会えなかったんだよ……？」

怒りと悲しみ、そして兄妹間の恋愛を許さない世間への憎しみが込められた、妹の言葉。

その言葉に、どれほどの意味があったのか。それほどの体験を経て、その言葉が生まれたのか。

可哀想な少女、しかし妹。

その壁があつたから、美紀はこうなったのか。

「もう嫌だよ……」

美紀の口から漏れた、涙声。碧は一瞬、戸惑ったが、次の言葉でそれは冷める。

「次は…もっと私を見てくれるように……してあげるね……？」

#### 第四話（後書き）

遅くなりました。

忙しかった、なんて言い訳はしませんが…。忙しかったです。  
皆さんの感想、創作依頼お待ちしております。

## 第五話

(……?どういう意味だ?)

碧は眉をひそめ、美紀の動きを待った。そして、

美紀は碧のズボンのチャックを開けようと手を伸ばす。

「……っ!」

「……さっき言ったよね?お兄ちゃんが私を見てくれるように、って」

まさかこんな方法を使ってくるとは思わなかった。

碧は体をどうにか動かし、それを回避する。

しかし、その動きは美紀の突然のキスによって封じられてしまう。

何分、何時間か前にしたキスとは比べ物にならないディープキス。

妹だ、という事実さえ感じられなくなってしまいそうだ。

美紀は唇を離し、こう尋ねる。

「じゃあ……お兄ちゃん、いい、よね……?」

そしてもう一度、ズボンのチャックへ手をかける。

碧は抵抗もなくそれを受け入れてしまった。こんなことをされれば、

嫌でも興奮してしまう。

理性はそれを止めようとするが、本能はこれ以上の事を求めてしまう。

理性は駄目とわかっているのに、本能が美紀の裸体を想像してしま

う。  
理性と本能がぶつかる、とはよく言うが、ここまでくると精神的にもダメージが大きい。

(誰か……助けに来てくれよ……)

せめて、逃げるきっかけが欲しい、と碧は思う。

しかし、それを許すほど、美紀は馬鹿じゃない。

(どうにか……ならないのか……)

美紀の手がやがて動き、チャックを開ける。

ベルトに手をかけ、外していく。

すると美紀は動きを止め、少し考えるような仕草をし、こう言った。

「お兄ちゃんが脱ぐなら、私も脱がなきゃ……だよね？お兄ちゃん」

碧は首を振ったが、どうやら表情は言葉とは裏腹だったようだ。

満足そうな微笑をし、自分の服へ手をかける美紀。

そして……

「期待しちゃった？お兄ちゃん。全部脱ぐと思った？ねえ、お兄ちゃんってば！」

下着姿の美紀は、恥ずかしげも無く一方的な会話をする。

なるべく冷静で、そして美紀の言葉は無視しようとした。

しかし、先ほどより大きな興奮を覚えてしまう。

「ねえお兄ちゃん……？私、全部脱ぐからさ……私のこと見てよ……」  
そんなことをせずとも、この状況では美紀以外のことは考えられない。

「蒼香さんのほうが胸あるし、スタイルもいいけど……私だって……」  
碧は、足や腕を使って音を立て、『やめろ』というアピールを続けたが、それすらも聞こえていないようだ。

このままでは、兄妹でいられなくなってしまう。

碧はどうにかこの状況を打破するため、強硬手段——力で美紀を止めようと思いついた。

しかし、手足の自由は奪われてしまっている。

(くそ……どうすればいいんだ……)

——そんな彼にとっては最高の、美紀にとっては最悪のタイミングで玄関のチャイムが鳴った。

これで抜け出せる、と碧は素直に思った。  
来たのが誰であろうと美紀が玄関に行けば、その間に逃げ出せる。

——そう、来たのが誰であろうと。

## 第五話（後書き）

昨日、短編を書いたばかりですが投稿させていただきました。  
明日から金曜までは、テスト期間なので投稿はしません。  
今回の話を読んで頂いた皆様に感謝を。

## 第六話

しかし、美紀は予想外の行動をとった。

「無視、してもいいよね？お母さんはまだ帰ってこないし」

「っ……」

来客は、当然鍵を持っていないはずだ。そして、チャイムを無視し続ければ諦めて誰もが帰るだろう。

「じゃあ……続きしようか、お兄ちゃん」

美紀は服のボタンへ手を掛け、その時。

ガチャリ、と。

――玄関の鍵が開けられる音がした。

「！？」

流石の美紀も、予想外の来客の行動に焦っている。

（まだ……逃げ出せないか……）

碧はそう思い、思考を別の方向へ持っていった。

（今の来客は誰なんだ、母さんか？いや、まだ帰ってこないはず

……。他に家の鍵を持っているのは……？）

そう考えている間に、来客はドアを開ける。

美紀は相当焦っていて、小声で何かを呟いている。

チャンス、碧は思い、椅子から立ち上がる。

手足の拘束は取れていないが、長い会話の間に椅子との拘束を緩めていたのだ。

――だが、美紀は。

焦っていないながらも、兄を逃がすまいとベッドの上に押し倒した。

（しまった……っ）

しかし、まだ勝機はある。

来客がここまで来てくれれば安心だ。

——しかし、一向に、来客の足音が聞こえない。

ドアをあける音はしなかったので、玄関にいるのだろう。

（中に入ること躊躇っているのか……？……なら、こっちから……）

声を掛けよう、そう思った瞬間に、来客の声が響いた。

「碧君……？いない、のかな……？」

その声は紛れもなく、碧の彼女であり、幼馴染のものだった。

——しんと。沈黙が流れ、静寂が訪れる。

## 第六話（後書き）

久しぶりの投稿です。

11月にはテスト期間があつて、その後は他の作品を練っていました。

今年中に完結は難しそうです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4637x/>

---

歪兄妹愛日記

2011年12月3日19時46分発行